

平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

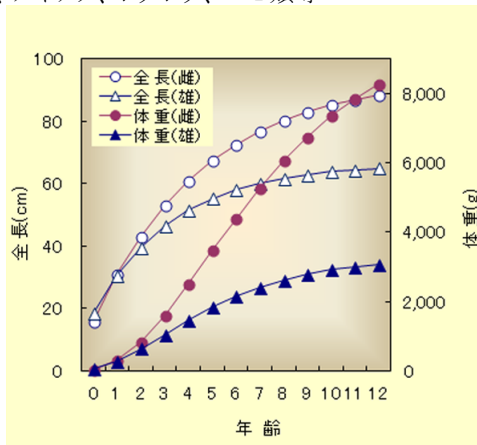
系群名 日本海西部・東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 12歳
成熟開始年齢: 2歳(50%)、3歳(100%)
産卵期・産卵場: 冬～春季(1～4月)、南ほど早い
索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
食性: 稚魚は小型甲殻類(主にアミ類)、未成魚以降は魚類(イカナゴ、カタクチイワシなど)、エビ類、イカ類など
捕食者: 着底期に同種のヒラメ、アイナメ、ホウボウ、ハゼ類等

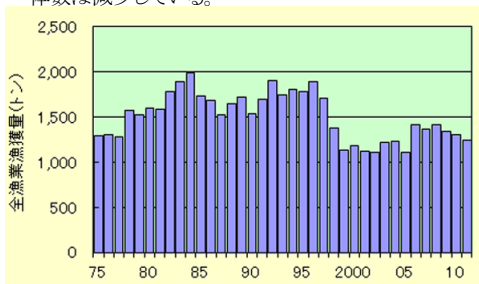


漁業の特徴

本種は沿岸域において刺し網、小型底びき網、沖合底びき網、釣り・延縄、定置網など様々な漁法により漁獲されている。系群全体での漁業種類別漁獲量では刺し網による漁獲が最も多く、次いで小型底びき網、沖合底びき網の順である。本系群では1980年代から事業規模での種苗放流が行われている。近年の放流尾数は若干減少し、1999年には約560万尾であったものが2010年には約432万尾となっている。

漁獲の動向

本系群の漁獲量は1984年に1,982トン記録した後、1,500～1,900トンを維持していたが2002年には1,103トンと減少した。その後、漁獲量は緩やかに増加して、2011年の漁獲量は1,242トンになっている。2011年の県別漁獲量は長崎県、島根県、福岡県の順に多い。現在の漁獲物は大型魚が主体である。ヒラメを漁獲する主な沿岸漁業の漁労体数は減少している。



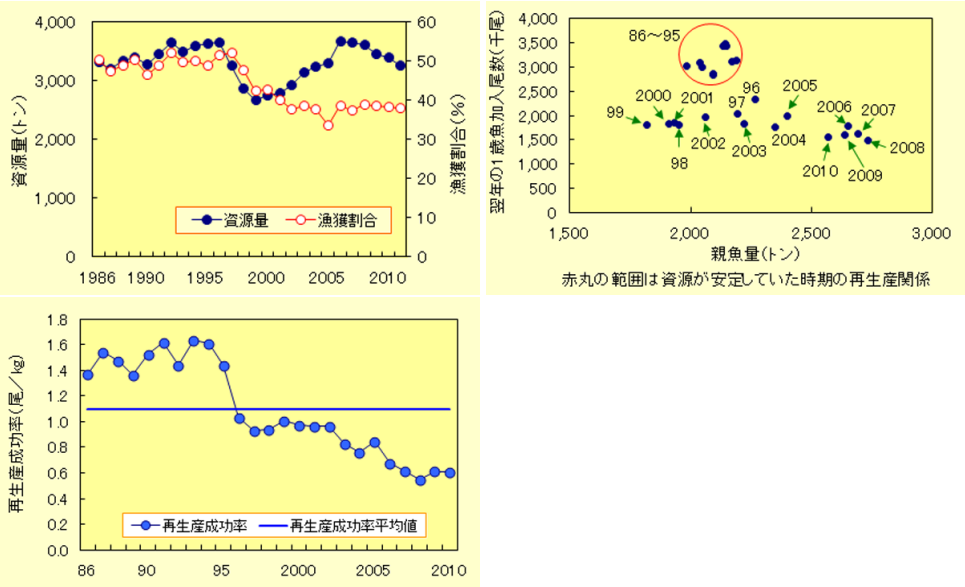
資源評価法

漁業種類別の年齢別漁獲尾数を合計し、系群全体の漁獲尾数を求めコホート解析を行った。小型魚の保護が行われていることから、1歳魚以上を解析に用いた。自然死亡係数は0.208とし、最近年のFの値は過去3年間の同年齢魚のFの平均値とした。親魚量の下限値(Blimit)は、加入量の上位10%(R-High)と再生産成功率の上位10%(RPS-High)の交点となる親魚量(2,144トン)として設定した。

資源状態

本系群ヒラメの資源量は1997年頃から急減し、1999年に約2,700トンまで減少した。その後資源量は回復して2006年に約3,700トンのピークを迎えた。2011年の推定資源量は3,266トンとなった。現在の資源水準は中位、動向は減少と判断した。2000年以降は1990年代と比較して漁獲割合が低くなっている。1996年以降再生産成功率が低下し、現在も低水準となっている。2011年の漁獲係数は0.52で、資源量の維持を目標とした限界値(Fsus:0.47)より大きく、加入あたりの漁獲量を最大とするF(Fmax:0.32)より大きい。このため、加入乱獲かつ成長乱獲にあると判断される。





管理方策

本系群のヒラメでは1996年から再生産成功率が低下し加入状況が悪化したため資源量が減少したと考えられる。近年の親魚量はBlimit(2,144トン)より高い水準を維持しているが、再生産成功率が低水準であるため資源尾数の増加に結びついていない。加入状況が改善しないため、2011年の漁獲係数Fcurrent(0.52)による漁獲では、資源量が減少すると推定された。そこで、資源を維持する漁獲係数Fsus(0.47)で漁獲した場合の漁獲量をABClimit、不確実性を見込んで0.8Fsus(0.38)で漁獲した場合の漁獲量をABCtargetとした。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1,070トン	Fsus	0.47	35%
ABCtarget	900トン	0.8・Fsus	0.38	29%

- ABCの値は1の位を四捨五入
- ABCには0歳魚は含まれない
- F値は各年齢の平均値

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 現在の漁獲は加入乱獲かつ成長乱獲
- 1990年代半ばの資源減少は再生産成功率の低下による
- 2010年の再生産成功率は低水準で推移
- 親魚量は維持されている

管理方策のまとめ

- 親魚量の維持
- 小型魚の保護
- 加入動向の把握(種苗放流も含め)が必要

執筆者: 鈴木健吾・中川雅弘・吉村 拓

資源評価は毎年更新されます。